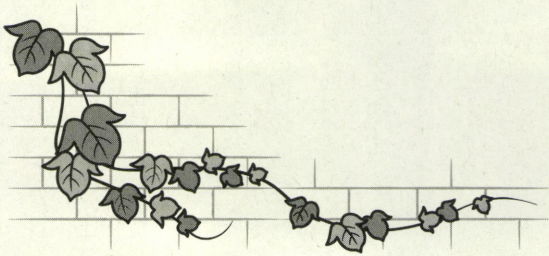


幼稚園の源流を求める旅  
森有礼の第二次在米時代(6)

## 北海道開拓使派遣女子留学生の教育



国吉 栄

### 二度目のポストン

二〇〇八(平成20)年、二度目にポストンに行った時、私には調べもののほかに楽しみにしていることがあった。私の関心三研究に興味をもって連絡をくださった日本文学研究者と、お会いする約束をしていたからである。

ハーバード・スクエアの、地下鉄から地上に出たところにある雑誌屋の前で待ち合わせた。すぐにわかった。屋外のベンチでコーヒーを飲みながら、話題は私の旅行の目的である森有礼にも及んだ。

「森有礼はいわゆる西欧かぶれと言われていますね」

「いえ、そんなことはありません。彼はむしろ西欧と闘ったのです」私は少しむきになって答えた。

「何か具体的な資料でもあるのですか」

「もちろんあります。たとえば、駐日公使デロングと闘った資料を見つけました。当時デロングと闘った日本人などいたでしょうか」

「それでは彼の英語採用論はどう考えますか」



「そうですね……」

まったく違和感のない日本語に驚嘆する暇もないほど、自然に意見を交換し合い、心地よい時間を過ごしたのち、ハーバード大学の構内を案内してくださった。ちょうど新人生の入寮の時期で、歓迎のテントが幾つも張られ、色とりどりの風船が揺れてにぎやかだった。

「これがハーバードさんの像です。でも西郷隆盛の像と同じように、本当はどんな顔だったのか、わからないのですけどね」

新人生が晴れやかに、次々と、家族や友人たちと一緒に「ハーバードさん」と写真を撮っていた。

広い構内を巡り、数ある図書館の利用手続きや学内で食事をするにはどこがいいかなど、私にとつて大切な情報をたくさん教えていただいたおかげで、それから十日ほどの調べものは大いにはかどったと思う。紹介いただいた同大学の東アジア研究の拠点である燕京<sup>イェンチン</sup>図書館のライブラリアンからは、森関連の珍しい文献を見せていただいたりもした。

### 森有礼と岩倉使節団に伴われた少女たち

明治四（一八七二）年末、世界の中に生きる日本の形を求めて岩倉使節団が出航した。使節団には北海道開拓使から派遣された五人の少女が同行していた。最年少の津田梅子は航海中に満七歳の誕生日を迎えた。渡航中は手がないため、少女たちは同行した駐日公使デロングの夫人に託された。先にふれた森のデロングとの闘いは、彼女たちの処遇に関するものである。もし森がデロングと闘い、それに勝たなければ、梅子が「ランマン家の娘」になることはなかったし、現在の津田塾大学が創設されることもなかったのではないか。

積雪のため、使節団は予定を大幅に遅れて、翌年二月二十九日にワシントンに到着した。駅頭に出迎えた森は少女たちを引き取るため、秘書ランマンを伴ってデロング夫妻に面会した。しかし夫妻は引渡しに難色を示し、使節団の正使岩倉具視に問い合わせたのちに汲々応じた。少女たちはその夜からランマンら個人宅二軒に預けられ



た。翌三月一日、森はデロング夫人に少女たちの渡米同伴について感謝の書状を送った。だが、ことはそれでは収まらず、デロングはそれから三か月以上にわたり、あらゆる手段を用いて少女たちの返還を要求し続けたのである。北海道大学北方資料室には、これに関する森とデロングの書簡の写し十数通が所蔵されている。

「出航の際に両親や親族から娘をよろしくと頼まれた。だから彼女たちの保護監督権はわれわれにある」

「少女たちの責任は私にある。どこに行き何を学ぶのかわからなければ送り出すことはできない」

「ヴァッサー・カレッジ入学が親たちの希望である。一官吏に過ぎないあなたに何の権限があるというのか。あなたでは話にならない。岩倉大使と話をつける」

「大使はこの件について権限をもっていない」

デロングは怒った。開拓使次官黒田清隆に「森に権限を与えたというのは本当か。少女たちがしかるべき学校に入るまで、われわれが保護監督する約束ではなかったのか」と手紙を出し、岩倉や使節団の副使木戸孝允にも

重ねて訴え、少女たちを引き渡すよう繰り返し迫った。

この間、森はきわめて困難な立場にあった。早くも三月十一日には幕末に結ばれた不平等条約の改正交渉が始まった。伊藤博文と森が交渉開始に積極的であったといわれるが、日本側は米国側から条約改正の全権をもっていないことを指摘され、ほとんど相手にされなかった。やむを得ず、勅許を得るため、伊藤と太久保利通が急きよ帰国することに決まった。森は自分の無能を理由に辞表を書き、帰国する二人に託した。

岩倉・木戸は、伊藤・森の言葉をいれて改正交渉を始めてしまったことを悔やんだ。二人の帰国後、森への風当たりは強くなる一方であった。木戸は「森らのごときわが国の公使にして公然外国人中にてみだりにわが国の風俗をいやしめる風説あり」(『木戸孝允日記』一八七二年四月十五日)、「森がしきりに教育のことに口を出す。彼が教育分野にすれば国のためにならないから反対せよ」(井上馨宛書簡同十八日)と書いた。こうした中、デロングの執拗な要求がなされていたのである。



岩倉はデロングにねじ込まれ、早い時期に腰が引けてしまっていた。しかし、こわもての米国大使に対し、若造森有礼は一步も引かなかった。デロングは岩倉・木戸に、森の外交官としての資質への疑義や、彼の主張の不当性を強く訴えていたから、「森がしきりに教育のことに口を出す」という木戸の非難の言葉には、彼女たちの教育をめぐる具体的なやりとりも含まれていたはずである。このとき森がデロングの言うままになっていたら、満七歳から十四歳の、まだ言葉もわからない少女たちはどうなっていたであろうか。森がデロングの前に立ちはだかり、あくまでも主張しなかったら、岩倉は彼女らをデロングに引き渡していたのではないか。

ワシントンに到着した年の秋に梅子が書いた作文がある(吉川利一『津田梅子』昭和五年)。直さず原文のまま引用する。そのままのほうが、寄る辺ない彼女たちの気持ちがよく表れているように思えるからである。

「A lady named Mrs. Delong took care of them, first all the girls think her very kind.」渡航中彼女たちはデロング夫人に託

された。「少女たちはみな、はじめは夫人をととても親切だと思った」。ところが行く先々で着物や髪型を珍しがられ、見世物にされたり、たびたび怖い思いや不快な経験をした。当初はサンフランシスコで洋服を調えることになっていたようであるが、夫人は着物のほうがよいと言って、彼女たちをいつも振袖姿で連れ回した。そうした経緯もあつたのであろう、夫人評は次のようになった。

「Mrs Delong was not kind first the girls was very nice but last was not kind.」少女たちはみな、デロング夫人を「はじめはとてもいい人だと思っただけで、最後には親切な人ではないと思つた」のである。北海道大学資料には、森が「デロング氏の所に行くのは彼女たちの意思ではない」と言っている文面があるが、森の主張には少女たちのこうした感情や意見も反映されていたであろう。

森は少女らの教育について識者に相談の上、臨時措置として、五月末から家を一軒借りてペスタロッチーの教授を学んだ住み込みの教師を雇った(森がこうした早い時期に教師の採用条件としてペスタロッチーに言及し



ていることは注目に値する)。個人宅からそこに移った少女たちは、午前中に二時間英語を学ぶほかは自由で過ごしていたようである。日本弁務使館の当時の書簡ファイルには、音楽レッスン費用の支払いに関する手紙もあるから、ピアノも習っていたのであろう。ランマン夫妻がしばしば様子を見に行ってくれた。日曜日には弁務使館に遊びに行き、森や官員に相手してもらったり、どこかに連れて行ってもらったりしたという。後年、梅子はそれらの日々を「Those were golden days for us」と振り返った。家族と遠く離れた異国の地で、golden daysと呼べる日々を送れたことは、少女たちにとって幸いであった。他方、あくまでも少女たちを取り戻そうとしていたデロンクが、「ヴァッサー入学まで少女たちをどうしようというのか」という森の問いに答えて、最良の委託先として挙げていたのが寄宿学校であった。デロンク書簡には、ある寄宿学校経営者の、「私は少女たちの安全を守るため、彼女たちを寮生と私の家族以外の人間とは接触させません」という言葉が記されていた。この時、

少女たちがこうした場所に送り込まれていたら、果たして後年の彼女たちの開花はあり得たであろうか。

森は少女たちを見守りながら、彼女たちを託し、本格的に教育を受けさせることができる信頼すべき家庭を探していた。この間、彼女たちに（実際には最年少の梅子がその対象であったと思うが）幼稚園教育を受けさせようという話がもち上がった。

### ワシントンの幼稚園

アメリカの幼稚園運動の担い手の一人ジョン・クラウスは森の駐米時代、教育局でイートンの助手をしていた。その後、エリザベス・ビーボデーに招聘されてニューヨークで幼稚園を開いたマリア・ベルテと結婚して幼稚園教師養成所を創設し、夫妻で幼稚園運動を牽引する。その彼が一八七五（明治8）年にビーボデーに宛てて書いた手紙が *Kindergarten Messenigen* に掲載されている。

かつて大戸美也子氏がこの手紙を紹介されたことがある。当時、同誌は経済的な危機に直面していた。同誌の存



続を望むなら定期購読者を獲得してほしいというアピールが、毎号誌面に掲載されるようになっていた。

「私は日本からの定期購読者を二人獲得することができません。ワシントンの元公使森氏がどんなに教育のことに興味をもっていたか、あなたもよくご存じでしょう」

(*Kindergarten Messenger* Vol. III, No. 6 June 1875, p. 139)

森は条約改正交渉からんで大久保・伊藤に辞表を託してから一年後の、一八七三年三月末に米国をあとにしていた。*Kindergarten Messenger* が創刊されたのは、森が去った直後である。クラウスは、「彼がどんなに教育のことに興味をもっていたか、あなたもよくご存じでしょう。彼なら *Kindergarten Messenger* を定期購読してくれませよ、そう思いませんか？」という口調なのである。



続けてクラウスはこう言った。「ちようど三年前のことです。六人の日本の紳士がイートン長官と私に伴われてワシントンの幼稚園を訪れたのは。ああ、その幼稚園はもうありません」。

「六人の日本の紳士」とは、言うまでもなく岩倉使節団の教育担当理事官、田中不二磨一行である。イートンとクラウスが彼らを幼稚園に案内したという三年前、すなわち、森がデロングの要求を退けて少女たちを自分の保護下においた一八七二（明治5）年、ワシントンには幼稚園が二つあった。その一つは、同じくピーボディーの要請を受けてハンブルグから渡米した Emma Marwedel が一八七一年に設立した幼稚園で、中央官庁街に近いK街にあった。日本弁務使館のあるM街からもほど近い。ピーボディーは同園をワシントンにおけるモデル幼稚園と呼んでいる。一八七四年の教育局報告でも同園だけが特別に紹介されているから、イートンが教育視察の日本人たちを連れて行ったのは、ワシントンの幼稚園を代表するこの園であったとみて間違いない。



Marwedelは、教育は幼稚園で終わるのではなくそこから始まるとして、三歳半から十二歳までの幼児・児童を集めた学校を開設し、幼稚園はそこに付設されていた。全生徒数五十、教師数五であったから、幼稚園としては十人程度の規模だったろう。「六人の日本の紳士」は同所に特別な感想を抱かなかつたようである（田中一行の視察報告書『理事功程』合衆国の部には、幼稚園についての記述はない）が、現に満七歳から十四歳の少女たちを預かっている森には、大変興味深い教育施設だったはずである。しかし同園は事情があつたらしく市内で転居し、最終的にはクラウスが嘆いているようにワシントンを引き揚げてしまい、一八七六年にはロサンゼルスに移つてしまった。だが、西海岸の新天地で多くの優れた幼稚園教師を養成し、幼稚園運動に大きく貢献した。

## ピーボディーのコメント

おもしろいことに、*Kindergarten Messenger*でクラウスの手紙を紹介したピーボディーは「その幼稚園はもうあ

りません」という部分に次のような脚注をつけている。

「もし森氏の気まぐれがなかったら、ミス・フーパーの幼稚園が放棄されることはなかったでしょうし、当時ワシントンにいた少女たちの教育に採用されていたことでしょう。そうすれば幼稚園がまるごと日本に移植されることになったでしょうに。けれどもミス・フーパーが彼の求めに応じてすべての準備を整えた途端に、話は打ち切られてしまったのです」

森への非難が記されたピーボディーのこの興味深い脚注を、どう解釈したらよいであろうか。一八七二年の時点で、「ミス・フーパー」が全米のどこかで幼稚園を開いていたという記録はない。彼女の名前は*Kindergarten Messenger*の一八七四年十二月号に掲載された幼稚園教師一覧に、やはりピーボディーによってドイツから招聘されたMrs. Kriegeの養成校の卒業生として現れるのが記録上の初出である。その次にMiss Hooper, Kindergarten in private house, Alexandria, Va.とある。教育局資料には翌一八七五年にワシントン市内にMiss Hooper's Kindergarten



が開設されたとあるから、彼女は最終的にはワシントンで幼稚園を開くという望みをかなえたのであろう。

これらから考えることは、ピーボディーの言うようにそれが彼の「気まぐれ」であったかどうかはともかく、少なくとも森が梅子の教育の選択肢として幼稚園を考えていたことがあったというのである。おそらくピーボディーやイートンらに勧められて、そうした考えを抱いたのであろう。森から好感触を得たピーボディーが彼女一流の行動力で早速人選に動いたが、それが実現しなかった、ということなのではないか。「もし森氏の気まぐれがなかったら（略）当時ワシントンにいた少女たちの教育に採用されていたことでしょう。そうすれば幼稚園がまるごと日本に移植されることになったでしょうに」というピーボディーのいわば恨み節は、彼女が森に抱いていた大いなる期待の裏返しでもあったろう。

森も梅子の教育には迷いがあったと思われる。年長の少女たちの受け入れ先は同年七月には決めていたにもかかわらず、早くから梅子の受け入れを希望していたラン

マン夫人には、「なかなか決められなかったの」と九月まで返事が遅れたのはそのためであった。

森がこの時点ですれほど幼稚園について理解していたか、どのような幼稚園観を抱いていたかについては確たる資料はない。梅子は知的にも優れ、意志も強く、言葉のハンディがあっても小学校での学業に耐えうると判断されて、ランマン家に引き取られたのち、地元ジョージタウンの私立小学校に入学した。結果として、幼稚園のシステムは彼にとつて現下の必要物ではなくなってしまうのである。しかし、イートンとクラウスに案内されてMarwedelの学校を見学した田中不二磨が幼児の教育に特別な関心を抱かなかったことに比べれば、自分の責任下に保護教育すべき幼年の少女を擁し、幼稚園運動の戦士であるピーボディーやクラウスらと直接かわりをもち、弁務使館近くにあるMarwedelの幼稚園を実際に訪問していたはずの森有礼が、幼児期の教育というものに一定の認識と関心をもっていたことは疑いえない。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）